

# Faulkner の *Sanctuary* について

岡 本 貴 太 郎

## I

Faulkner 文学の織りなす世界は、「人間存在」の根源にまつるところの「悪」と「罪」——それは人間の原罪につらなる——の醜悪な人間像である。そしてそこには醜悪な人間の喘えぐ「苦悩」がある。この苦悩の源泉は、彼の人間への深い「絶望」から生まれているのであって、それはまた現在に生きる人間の「虚無」から生まれたものである。Faulkner にあっては、人間は「呪われた存在」であるとみるのであるが、この悲劇的な呪いは、彼の描く Yoknapatawapha 郡の Jefferson の町に生きた過去の人間の喘えぎでもあり、またその呪いは、いまなお拭いさがりたく現代の人間のあいだに息づいている。

かように彼の作品のもつ悲劇性は、アメリカ南部の長い過去の歴史と現代の悲劇に他ならないが、その「腐敗と頹廢」した南部社会に生きる人間の苦悩は、どこまでも普遍的な現代人の苦悩でもあり、彼の作品の醸しだす雰囲気には、その「悪」と「罪」の汚れた人間の腐敗した臭気があり、すべての登場人物の魂に巣喰う深い「絶望」がたぎっている。

## II

*Sanctuary* (1931)は作者も自ら1932年版の Modern Library の *Sanctuary* の序文のなかで「想像しうる最も恐しい物語」<sup>1)</sup>と述べる如く、アメリカ南部

---

1) William Faulkner, *Sanctuary*, with introduction (Modern Library, 1932), p. vi.

社会の「頹廢と腐敗」の世界が描かれる。それは Lost Generation にあって、南北戦争後、急速に没落していった南部貴族階級、それにかわって抬頭した物質的で打算的な商人階級、無知で無道德で我執のつよい poor whites や negroes といった南部社会を構成する典型的な醜惡な人間像が描かれるとともに、その「頹廢と腐敗」の具体的なあらわれとして、強姦、殺人、売春、暴行、自殺といった異常な事件がくりひろげられるのである。Faulkner にあっては、人間はすべて「悪」と「罪」のにおいを背負わされた「呪われた存在」としてとらえられ、そのような人間を彼は sadistic なまでに執拗な筆致でもって描いてゆくのである。*Sanctuary* に描かれる Popeye という変質的な殺人狂をはじめ、Temple, Tommy, Goodwin その妻の Ruby や淫売屋のお主婦の Miss Reba やその他あらゆる登場人物は、——すべて Popeye の犯罪の直接間接の被害者であるが——一見何らかの形で罪を背負った異常な人物として描かれ、Faulkner にとっては、すべての人間に、その背負っている罪が見えるのである。彼にとって、人間の常態とは、罪の生活であると考えられ、彼が通常人を自分の魂の光に照しだして描くと、その通常人は異常なまでに罪を背負わせられていることをわれわれは読みとることができるのである。

Faulknerが好んで取扱っている Sartoris という没落貴族の人間像の中で、*Sanctuary* に出てくる Benbow という43才にもなる Oxford 大学出身の弁護士は、男と別れた女と好んで結婚して、継娘もありながら、その妻のもとを逃げ出すのだが、その直接の原因は、この妻という人物が、小海老が好きなために、彼は金曜日毎に、小海老の入った惡臭な箱を停車場から家まで運ばねばならないのであった。その妻との生活に倦み疲れた彼が新しい生活を求めて10年来住みついた Kinston を離れ、Jefferson にやって来るが、その途中喉の渇きを癒そうとして Frenchman's Bend の近くの泉に立ち寄り、そこではからずもこの物語の惡の権化である Popeye に出逢う。この両者は、やがて南北戦争前に建てられ、俗に「フランス人の古屋敷」として知られている館にさまよい込んで来る Gowan と Temple という二人と——特に

Temple によって引き起される Tommy 殺害事件によって——対決する。そしてこの対決の間にはさまる Temple の存在こそは、この作品のテーマの中心をなしている。作品の冒頭において、この悪の権化である Popeye が半ば威嚇的に Benbow を館に連れていく事実、もちろんあの裁判所での Benbow の敗北の伏線になっていると同時に、悪そのものの象徴となっていることをわれわれは読みとることができる。

*Sanctuary* の heroine であり、彼女が直接間接に関係して、Tommy, Red, Goodwin, Popeye の順に四人の男が死ぬことになるこの物語の中心人物である Temple は、アルコール中毒にかかった不良な女子大生で、後の作品 *Requiem for a Nun* で因果な夫婦関係を結び、二人の子供さえもつのだが、これまた破壊と悲劇をもつ Gowan と一緒に、酒の密売をやっているギャング一味の魔窟へ行く途中、自動車事故のため、やむなく彼らの「フランス人の古屋敷」で一夜をあかすことになるのである。高い恰好のいい頭、思いきり真赤に染めた唇、やわらかい顎、絶えず右ひだりと視線を投げかける、うつろな彼女の眼差しは、「冷たく掠奪的でそれでいて、もの想わしげ」(cool, predatory and discreet<sup>2)</sup>) である。彼女の父は判事で、父の有する富と権力のなかで放任されるままに、かつ溺愛され育った女である。すなわち物質文明の恩恵のみ与えられ、深い理解と愛情を与えられず育った彼女が、やがて思春期と共に、ふしだらな性の世界に身を沈めていくのである。

物語はこの Temple を中心に、彼女を狙う野獣のような男たちの示す不思議な挙動は、いわば人間の心の奥底に潜む本能の怖ろしい世界が投射されている。そして彼らの挙動は、その根底において、一様に「性」に対する烈しい欲求を、ほとんど原罪的とまで思われる性慾の罪深い衝動を宿すものである。それはまた、狙われた Temple からみれば、測り知れない恐怖と、それを怖れつつも、一種の好色的な期待との混りあった官能の世界が, sadistic な Faulkner の手に操られながら展開してゆくのである。

作品の冒頭で描かれる「ポパイの眼はゴム球のように見え、あたかも手で

2) William Faulkner, *Sanctuary* (Random House, 1958), p. 29.

触れるとへこみ、それから渦巻状の拇指のしみを残してもういちど脹れあがる<sup>3)</sup>ような先天性微毒のため impotent である Popeye、酒類の密売をやっている Goodwin と彼の妻と称する淫売女、仲間のうち一番気の弱い Tommy という男、酒にかけても女にかけても、一筋縄ではいかない Van という無頼漢、得体の知れない盲目で聾の老人といった悪の世界の象徴とでもいうべき人物が、それぞれ無目的に彼ら一味の住家になっている「フランス人の古屋敷」と言われている屋敷内を徘徊するのである。彼らの行動は、それ自体が、読者にとって謎であるばかりでなく、彼ら相互の間にも、依然不可解な謎として残っているらしく思われる。それは詮じつめれば、結局このような悪の世界に不幸にも陥込んできた、18才のかよわい女とみえる Temple の肉体を狙う、男たちの挙動であるには違いないのだが、しかも Faulkner の狙いは、むしろ彼らのそういう不審な行動を通して、いやがうえにも高められる、美しい処女の恐怖心とそのなよやかな肉体が示す苦悶の形相にあると考えられる。この一味の中でも、最も兇悪かつ醜悪な人物はもちろん Popeye である（彼の素性の全貌は、曖昧ながら、この物語の epitome において思い出として語られる）。Malcolm Cowley もこの Popeye を ‘Popeye himself is one of several characters in Faulkner’s novels who represent the mechanical civilization that has invaded and conquered the South.’<sup>4)</sup>と指摘するようにそれは南部を徐々に侵略していった資本主義機械文明そのものの不気味さの象徴に他ならない。とにかく Faulkner は、アメリカ南部の歴史的必然から生まれた産物として、これら一群の醜悪なる人間像を描き、これまた華やかであった昔の追憶に、物質文明の圧迫からくる苦しい現実を忘れんとして、影のように生存を続けていく倫落の貴族を配して、経済的にも道徳的にも、破壊の寸前にある20年代の南部の姿を、野獸的

3) *Ibid.*, pp. 5—6.

4) Malcolm Cowley (ed.), *The Portable Faulkner*, with introduction (The Viking Press, 1968), p. xxii.

な層にまで墮落した「性」の相において捉えようとするのである。

Temple という女性の肉体奥深く潜む sanctuary を狙う Popeye は、生来の impotent であるという中心的テーマは、それ自体作者も ‘He was merely symbolical of evil. I just gave him two eyes, a nose, a mouth and a black suit. It was all allegory.’<sup>5)</sup> と語る如く一の allegory とも解釈され、また事実、Temple の中に色褪せ、衰退していく南部貴族の没落の姿を見、Popeye をその素因の一つとして、南部を蝕んでいく機械文明の象徴としてわれわれは読みとることができるのである。Hemingway は *The Sun also Rises* (1926) や *Across the River and Into the Trees* (1950) において、やはり戦争によって impotent になった男と、官能的な女性との遂に満たされることのない絶望的な恋の世界を nihilistic な筆致で描いているが、*Sanctuary* もまた、こういう生きた人間でありながら、その根本的な機能を否定された屍同様な、呪われた人間存在を描いているのである。われわれはこの憫むべき人間 Popeye の行動の中に、人間のもつそれぞれの負目の生きる苦悩を読みとることができるのである。Hemingway の場合には、それは戦争がもたらした一つの避けることのできない宿命と考えられ、自己否定的な cynicism によって、たたきつけられているのを見るのであるが、それが Faulkner の場合には、南部の頹廃と腐敗した社会を背景に、肉体を激しく揺さぶる性慾の空しい焰が一層露骨に、自己主張の形をとって発展し、さらに深い絶望の深淵に投げ込まれていく姿が描かれているのである。

Temple の coquettish な若い爛熟した肉体が、納屋の小部屋の中で、恐怖におののく姿を眼のあたりにしたとき、Popeye は、まるで ‘He stood looking at her. He began to thrust his chin out in a series of jerks, as though his collar were too tight.’<sup>6)</sup> のであるが、それはまたやがて、このような空しい目的を達するために邪魔になることから、黒人 Tommy の生

5) James Meriwether & Michael Millgate (ed.), *Lion in the Garden* (Random House, 1968), p. 53.

6) *Ibid.*, p. 98.

命を断たねばならなかった、この無能な男が女に対する場合の弱さを物語るものである。そして早熟な子供が、もの珍しそうにでもやるように、corn cob を使って womanhood (sanctuary) を凌辱し、さらに Miss Reba が経営する joint に Temple を連れこんで、Red という男を与え、彼らの愛のいとなみを傍観して、せめてもの慾情を満足させるといった sadism の世界が描かれるのである。寝台の上に、のたうち廻る男女の姿に、帽子も脱ぐことを忘れて、恍惚と見とれる Popeye の姿態には、少しの虚飾もなければ欺瞞もない。たとえ間接的にではあっても、肉体の歓喜を初めて味った者の絶対的な満足感をわれわれはそこに感得することができるのである。けれども彼には所詮その女を所有することができないという苛立たしさが、Red に対する嫉妬心となって、彼の心を掻き乱し、遂には彼を殺して、第二の殺人を行うのである。最後に Popeye は、故郷に母を訪ねるために帰省の途中、他の人を殺そうとしているところを捕えられ、裁判もまともに行われず死刑になるのである。いよいよあと四・五日で処刑されるというにもかかわらず、彼は至極落着いたもので、折角 Nemphis から来てくれた弁護士にも、一向に弁護を頼もうともしない。‘... his head lifted, in his smooth, pallid face his eyes round and soft as those prehensile tips on a child’s toy arrows.’<sup>7)</sup> をして静かに死を待ちながら、監房の壁の裾に、マッチの燃え殻で12の線を引き、時間を計るつもりなのか、線と線の間に依然と、タバコの吸殻の山を積み重ねていく、まるで子供のように邪念のない殺人犯 Popeye は、いよいよ scaffod の下に立って、網が彼の頭の上から被せられたとき、乱れた髪の毛を最後まで気にして、“Fix my hair, Jack.”<sup>8)</sup> と sheriff に頼むのであるが、こうした彼のある意味では不可思議とも思える動作の中に、われわれは Hemingway の *A Clean, Well-Lighted Place* に描かれる nihilist の老人について waiter が言う「あらゆるものが無で、人間も無だ。ただそれだけのことで、光はそれが必要とするすべてであり、それはあ

7) *Ibid.*, p. 305.

8) *Ibid.*, p. 308.

る種の清潔と秩序なのだ」<sup>9)</sup>という一つの悟りが Popeye の中にもあることを感知することができるのである。impotent ではあるが、或は普通人以上に敏感であるとも言うる、この種の宿命の人として、彼が歩んできた道は、むしろ自然な自己主張であったと言えるのであろう。けれども、このかりそめに垣間見た官能の世界が、実は真黒に口を開いた虚無であるのを知ったとき、いっそ不具ではあっても、自己の human bandage の中にこそ、「ある種の清潔と秩序」があることを悟ったのである。“Fix my hair, Jack.”という最後の言葉は、少なくとも、いまわしい女性の邪淫の手から逃れることの出来た、清潔な現在の自分が、掻き乱されたことに対する怒りの言葉として受取られなければならないであろう。

この物語の中心人物 Temple は、身に迫る男たちの気配を感じながらも、コンパクトを取り出して、白粉をはたき、口紅を塗ることを忘れない女性である。何時襲ってくるかも知れないときでさえ、なおかつ女性の本能を発揮することを忘れない彼女は、既にその本質において、女性のもつ whore の本質であるとも考えられる。彼女は自分の身を守ろうと逃げ惑うが、彼女の示す姿態の一つ一つは、自然にあふれるものとして、男性に結びつき、彼女自身ではどうにもならない、肉体の発散する魅力に眩惑される不可抗力な魅惑と破壊の力をもつものであると考えられる。われわれはこのような無人格で無節操な女性の原型を Faulkner の最初の小説 *Soldiers' Pay* の Cecily にみることができるのである。

Cecily is the apparently typical Scott Fitzgerald post-war flapper, thin, flat, and emancipated, the prototype of the modern freedom  
of the sexes.<sup>10)</sup>

といみじくも Maxwell Geismar も指摘するように、彼女を中心にくりひろげられる性の渦巻のうちに、この作品の Temple と同様、無性格で無節操な、

9) Ernest Hemingway, *The First Forty-nine Stories* (Jonathan Cape, 1972), p. 313.

10) Maxwell Geismar, *Writers in Crisis* (Houghton Mifflin Company, 1942), p. 147.

「性」への無知なる誘惑者として描かれている。この作品の主人公 Donald の許嫁 Cecily は、Johns の抱擁に冷かに身をゆだね、一方では無感動に Farr との情事を重ねるといった女性で、自己のもてる肉体のにおいを発散させながら、ただ現在の瞬間にのみ生きる利己的な自己中心的な女性としてとらえられる。

この最初の小説 *Soldiers' Pay* において Faulkner はすでに、「性」を本質的に「悪」と「罪」の根源であるとみなし、その「悪」の根源を宿す女性として Cecily を描いている。その悪の根源を女性にみる彼の態度は、人間の悪の要素をアダムとイブの原罪にまで遡って眺めようとする、彼のキリスト教的信念を物語るものだとも解釈できよう。

Miss Reba の館を訪れた Benbow を目前にして、Temple が「フランス人の古屋敷」での出来事を回想して物語る長い passage は、そのような状況におかれた女性の心奥深くに秘められた複雑、怪奇な心理の世界を realistic な筆致で描いたものであるが、それは「女たちが、自分は舞台の立役者だと自覚したときによくやる、あの華やかな、お喋りの独語<sup>11)</sup>」に過ぎないと言うが、そこに宿命だとも、考えられる女性自身にとっても抵抗することの出来ない本能の罪深い世界を、垣間見ることができるのである。

Faulkner の世界では、negro の場合とは意味は違うが、女性もまた「呪われた存在」として描かれている。つまり女性はこの世の「悪」の一つの根源と考えるのである。“It's us poor girls,” Miss Myrtle said, “causes all the trouble and gets all the suffering.”<sup>12)</sup> とこの Myrtle が語る如く、女性はずべてこの世の「悪」の原因となり、その結果苦しみを与えずにはおかない。このようにして Faulkner の描く女性には、それぞれ罪（破壊）の役割を背負っているわけで、その罪が男性の本能と結びついて、一層ひそかな陰影を醸しだしてくるのである。男性に対する限り女性は「悪」の要素とし

11) *Ibid.*, pp. 208—209.

12) *Ibid.*, p. 248.



で働きかけてくるのである。Faulkner が描く「性」の特色は獸的な肉慾であり、それは必ずそのうちに「悪」と「罪」を内包する。Temple は impotent な Popeye にとうもろこしの穂軸で犯されるが、その時の自己の姿を告白する性愛への白痴的な態度のすさまじさや、彼女が、Grotto という酒場の一室で、「性」の満足を求めて Red にとりすがるときの

He came toward her. She did not move. Her eyes began to grow darker and darker, lifting into her skull above a half moon of white, without focus, with the blank rigidity of a statue's eyes. She began to say Ah-ah-ah-ah in an expiring voice, her body arching slowly backward as though faced by an exquisite torture. When he touched her she sprang like a bow, hurling herself upon him, her mouth gaped and ugly like that of a dying fish as she writhed her loins against him.<sup>13)</sup>

その姿態は、完全に獸的であり、「性」にもだえる醜惡な人間像である。「弓なりにそって」「死にかけた魚のように」口をあけた Temple の姿に、われわれは「魂」を喪失したどのようにも救い得ない人間の姿をみるのであるが、Faulkner がその強靱な精神と執拗な筆致をもって、人間の肉体に宿る性もここまで掘り下げてくるのであって、かくしてわれわれは Benbow の瞑想した絶望の人間像につながり、人間の原罪にまで遡る人間の悪をのぞきこむことができるのである。そして Faulkner の内面に巢喰う深い人間への「絶望」に、性の虚無的な喘ぎと動きを感受するのである。そして

Better for her if she were dead tonight, ... For me, too. He thought of her, Popeye, the woman, the child, Goodwin, all put into a single chamber, bare, lethal, immediate and profound: a single blotting instant between the indignation and the surprise.<sup>14)</sup> And I too; thinking how that were the only solution.

13) *Ibid.*, pp. 231—232.

14) *Ibid.*, pp. 213—214.

と言う Benbow の独白となってあらわれるが、ここにわれわれは Faulkner の「人間への絶望」を認識するのである。彼にあっては、人間の肉体の必然の (inevitable) 作用としての「性」は、必然の結果としての「悪」と「罪」を生むのであり、「死」による解決以外に人間がその「必然」から脱却することは不可能なのである。こういう carnal desire は自己集中的に発散し、自己の欲すると否とは問わず、不可抗な力をもつ、強烈なものであり、その結果恋人が Popeye に殺されることがわかっているにもかかわらず、そこへ身を投げかけずにはおれない女性のもつ宿命と言えるかも知れない。Temple が法廷で罪のない Goodwin を偽証することによって、間接的に殺したことも、女性のうちに宿る「悪」の顕現であるとみることができる。また masochism 的な傾向をもつ彼女の歪められた「性」の欲求が、Popeye に対してなお愛着を感じさせたとも考えられる。

### III

Faulkner の作品に描かれる「悪」と「罪」の「絶望」の中には、もはや「救い」といったものはなく、「人間の営み」のいっさいをも否定しているかのように感受できるのであるが、その「絶望」の中にあって、一脈の救いをわれわれは彼の描く女性のもつ motherhood の中にうかがうことができる。*Sanctuary* に描かれる Goodwin の妻で、「女」という呼称で扱われている彼女は、いつも Goodwin との間に出来たらしい男の子を抱いているが、この女が夫に対して示す徹底した愛着は、献身的な完全なる自己否定に基づくものである。それは肉体のすみずみまで知りつくした女にして初めて可能な世界であると言うことができるであろう。フィリッピンで軍隊生活を送っていたとき黒人の女のことから、仲間の兵隊を殺害し、刑務所にいる Goodwin を出獄させるため、自分の肉体まで売って金をこしらえたほどの女である。Temple のような predatory なタイプの女性に対して、この女は、motherhood につながる productive な要素をもつタイプの女性であると考えられるであろう。自分の肉体を売ってまで、男につくそうとするこの女は、Temple

の出現によって、夫の気が移ってゆくことを恐れながらも、Temple に対する嫉妬心をこらえ、彼女の世話をせずにはおれない優しい気性の女性として描かれ、そして今また、自分の生命とたのむ男が、Tommy 殺害事件に絡み、殺人の嫌疑をうけて、何時処刑されるかも判然としないときに、Goodwin の弁護をかってでた Benbow の弁護料として、自分の肉体を売る覚悟さえしているのである。そしてまた彼女は、Temple に夫を奪われまいとして絶えず警戒の眼をみはりながらも、片時も子供の世話をすることを忘れない。Benbow の世話になったホテルの部屋の中だろうが、Goodwin のいる監房の中だろうが、一向におかまいなしに彼女は丹念に赤ん坊のおしめを替え、また哺乳壺を持って行くことを忘れない。この子供とその世話をする母である女の描写が、ほとんどこの物語の最後まで随所に描かれるが、この作品のもつ「醜悪」のうちにあって、Faulkner の描く女性がほとんど「悪」であるが、その根底において原罪の問題につながり、それが苦悩を通して「救い」として、女性そのものの中に解決（光明）の要素を見つけ出そうとするかのように思われる。そしてわれわれは、その「救い」の女性が穏やかな愛情と豊かな本能をたたえた子供を持つ女性にそれを見ることができるのである。

先づわれわれはそのような女性として *Light in August* (1932) における Joe Christmas の悲劇とは対照的に描かれ、作品のもつ悲劇性のうちにあって、ただ一脈の清浄な流れとして、Lena Grove にそれをうかがうことができるのであり、また *Old Man (The Wild Palms)* (1939) に描かれる tall convict がミシシッピー河の大洪水の際に助けた「子を宿す女」を想起することができるのである。Lena Grove はすなわち女性（母性）の権化として描かれ、Faulkner の理想とする女性として「耐え忍ぶ」(endurance) 心をもつ点で、*The Sound and the Fury* (1929) の Dilsey と共通するものであると考えられる。*The Wild Palms* の結末において、墮胎手術の失敗の後、Charlotte は死に、彼女の夫の差し出す毒薬で自決するのを拒み、「悔恨と無の間<sup>15)</sup>にあっておれは悔恨のほうを選ぼう」と瞑想する Wilbourne は、

15) William Faulkner, *The Wild Palms* (Random House, 1939), p. 324.

牢獄で思い出と悔恨にみちた恥辱の一生を、その苦難 (sufferance) を耐え忍んで生き抜こうと決心する描写をわれわれはここに想起するのであるが、彼はその性によって魂を剝奪されたにもかかわらず、その愛慾の苦しみに耐えようとしていることに注目するのである。Faulkner は執拗なまでに愛慾の問題を追求するが、それはなんらかの意味で Puritanism につながるのかも知れない。彼にあっては、この性の問題は、一つの運命的な苦悩となるものである。

Faulkner の「耐え忍ぶ」という言葉は彼の作品において、随所にうかがうことができるのであるが、それは彼のもつ人間への絶望の中のただ一脈の救いの信念であって、それによって、人間の生活の虚しさを、押さえながら一つの生命の動きとして救いを求めようとするのである。すなわち人間はすべて「耐え忍ぶ」ことによって一つの光明を見出し、そのかなたに耐える「人間の魂」を追求する彼の峻厳な humanism をわれわれは読みとることができるのである。